

「3・11慟哭（どうく）の記録」

（金菱清編）

死者・行方不明者が1万9千人を超えた東日本大震災から1年。激震、巨大津波、そして東京電力福島第1原発事故からの日々をどう生き抜いてきたのかを被災した71人が自らつづった記録集。

津波が沿岸部をのみ込む光景などが報道されたが、「被災地以外の人にも被害のスケールが圧倒的な映像の力で伝わる部分はある。しかし、実際に被災した人たちの視線からの真の記録

□新刊紹介□

「がこぼれ落ちていないか」との思いからまとめたという編者。漁業者、学生、消防団員、原発関係者、さまざまな立場の被災者一人一人が実体験を濃密に、生々しく記述することで、ミクロな視点から被害の実態や多様性を浮かび上がらせることを狙いとした。

本県では、約7千人の被災者が現在も避難生活を続ける。本書では被災者が混乱の中、ふるさとを離れ、新潟へ至るまでの経緯、中越地震、中越沖地震を経験した本県の災害対応についても記されている。

近い将来に首都圏や東海地方などでも巨大地震が起り得る可能性が言われるが、発生時に、いかに対処し、どのような支援をすべきなのか。一編一編が、その在り方を問い掛けている。